

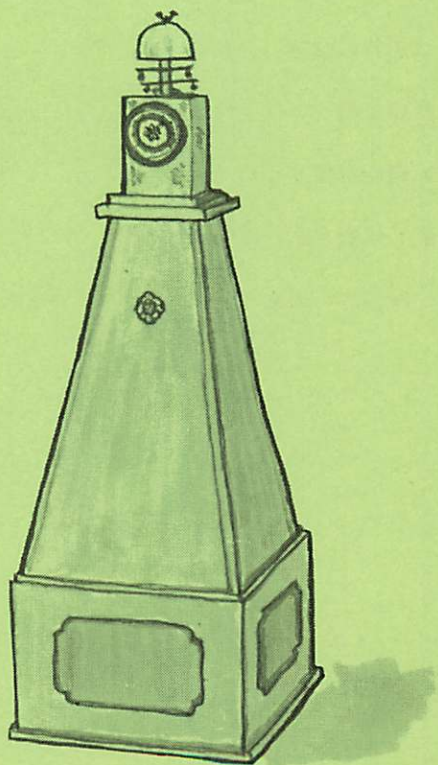
老舗の街・尾張町シリーズ7

---

アナログの街・尾張町

---

尾張町商人の伝統とロマン



## 目 次

はじめに	1
尾張町の魅力	2
安らぎの街・尾張町	3
「おやま」へ至るまで	5
歴史に登場した加賀の意味	5
江戸三度京三度の役割	7
加賀の隠し道の機能を探りつつ	8
前田藩主より最も信頼された尾張町商人	9
アナログの街・尾張町の未来	10
あとがき	12

## はじめに

歴史を振り返る時、私達はそれを創り上げてきた人々の連綿とした流れの中に計り知れない命の価値を見いださせられるものです。これは単純な数値では決して解明出来るものではなく、多くの未知なる可能性という契機を持ちながら現在を生まれさせ、さらに未来のより良いものへ向かって行くものです。

金沢が初めて歴史に登場するのは、正和元年(1312年)に遡のぼる商業集落である山崎村<sup>くぼ</sup>凹市からであります。やがて中世後期の一向一揆の勃発とともに、南北朝以来強大な支配権を持っていた富樫氏による守護領国制も解体させられ、加賀の一向衆による自治が100年近く続けられることになるわけです。これに終止符を打ったのは、戦国時代末期の覇者織田信長であり、その後の前田利家公の入国につながるものです。

前田利家公は七尾から金沢に入るや否や、山崎村凹市による商業活況地であり、同時に一向衆の精神的中心であった金沢坊の地理的条件を生かして、ここで大規模な土木治水工事を行って金沢城を始めとする町作りを実施することで藩政時代300年間の繁栄の基礎を固めたのです。特に当時の治世者のほとんどがそうしていたように、自らの出身地であり、気心の知れた尾張名古屋の荒子地方より連れて来た商人を主に住ませた、ここ尾張町はお城のお膝元ということも手伝って経済・政治面で重要な役割をになって繁栄していました。

尾張町は現在でも金沢における老舗が多く残る街であり、金沢城の正門である大手門のすぐ前に軒を並べております。特に藩政時代は参勤交替の主要な通り道として格式を持っていました。一面で難しいといわれる商業文化をささぐり、さらに芸能の街としての面さえ持ち、飽きずに商いをし続けた先祖の努力による多彩な実績は同時にいろいろな推理とロマンを生み出しております。

それはこの街が近代化の尖兵となることなく、忘れ勝ちな歴史と伝統という「しっぽ」をしっかりと引きずっている賜物です。0と1による2進法で全てが解決出来るコンピューターに代表されるデジタル的発想ではなく、あまりに人間臭い生命力が宿っているゆえの魅力でしょうか。

## 尾張町の魅力

金沢は京都や奈良のように天皇の住んだ一千年都市でもなく、武家政治の発端となった鎌倉のような八百年都市でもありません。戦国時代から徳川幕府成立時に形成された各地の城下町の1つであり、幸いにも第2次大戦による戦災被害をほとんど受けなかった中堅都市にすぎないのです。確かに明治維新直後は東京・大阪・京都に次いで全国4番目の都市でしたが、国家的プロジェクトに見られるような産業がなかったこともあり、最近では1週遅れのトップランナーとさえいわれています。

にもかかわらず、金沢は全国的に見ても根深い注目を浴びています。機会があれば1度は住んでみたい！と願う「住み易さのベスト1」の候補地によく上げられている程なのです。

この魅力は、近代的合理性とは違い、深みのある歴史と伝統によって培われて来た面から評価されるものなのでしょう。実際、この都市の、この街の良さは、難しくいえば「アメニティ」という最近の言葉で現わされます。

意味は快適性と定義されるのですが、人間にとっての暮らし易さ、気持ち良く暮らせる環境に満ちていることに他なりません。今の私達が近代化という美名のもと、つい失いがちになっていますが、本来の自然な人間らしさとでもいいますか、その存在空間に不可欠なものを持っているはずなのです。いわば、日本的なるものをまだ何処かに保っている趣[おもむき]に、人々は魅かれるのでしょう。

これは例えば、京都大学の歴史文学者だった会田雄次氏が、西洋と日本の母親達に「母子の二人だけで荒野にいる時に、凶暴な熊が目の前に出て来たらどうしますか」と聞いたところ、

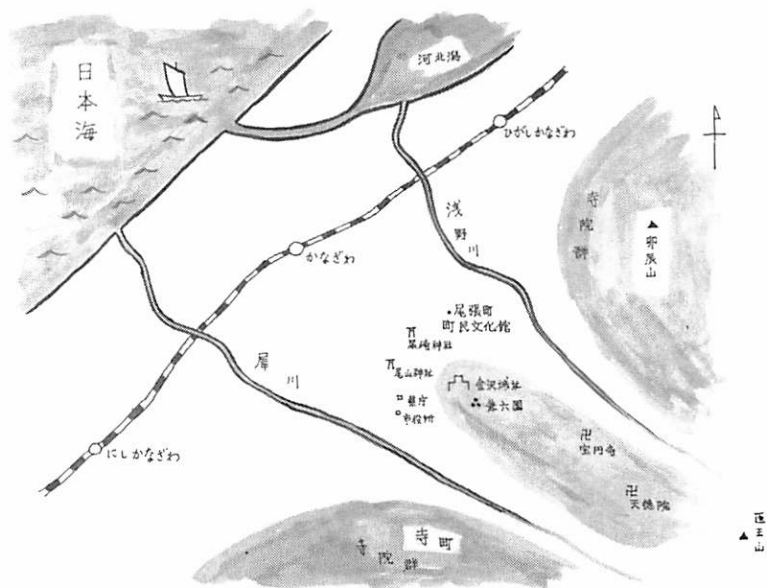
西洋の母親が「子供を背中に隠して、熊に対して両手を挙げて立ち向かって行く」と答えたのに対して、

日本の母親は「熊に背中を向けて、子供を抱きかかえてうずくまる」と、ほとんどの例外なく答えたのを見ても、素朴な文化の違いとして見られるのです。そ

して、ここに日本的なるものの原点、恥の美学とでもいうべきものが感じられるのです。

いわば、日本人というのは今の守られた子供の立場から考えて、母親の懷に抱かれるのが大変好きな民族であり、そこに安らぎとか憩いとか、日本人らしい安定した生活の好ましい環境を実感するのではないか、ということが事実として出てきます。それは、良いとか悪いとかの価値判断を超えた感性の問題、ないし日本人の精神構造の問題にまで至ります。

この好ましい環境というものを、土地構造の面で象徴的に提供し、頑なに残しているのが、金沢の中でもまさに尾張町界限でないかと思うわけです。



### 安らぎの街・尾張町

金沢の地形を大きく考えると、まず南側に屏風のように医王山や白山などの山が連なっています。その屏風のような背中から、両手を差し延べる如く寺町台地と卯辰山丘陵が張り出して来ており、これらを縫うようにして、浅の川や

犀川が兩足を伸ばすようにユツタリと流れております。2本の足のつま先を見ると、河北潟から日本海という母なる海が連なって行きます。

金沢はこれらの自然環境の中に、しっかりと抱きかかえられているといえます。詳細にみれば、この背もたれに凭れて膝の上に乗っているのが金沢城であり、尾張町はお城のすぐ真下にあることになります。そして、この地形構造こそは日本人にとっての永遠のアメニティ、本当に落ち着くところを如実に現わしているのではないのでしょうか。

全国的に見れば、このような地域はまだまだ発見出来ましようし、又四季の変化の過ごし易い所もあります。公平に見て金沢は冬の雪や、年間を通しての雨の多さといった点では劣っています。

しかし、中世後期に富樫氏の庄政から農民が立ち上がり、一向一揆のパワーを持ったものの、前田利家公の金沢入城以来、人心が安定して商業の発展から文化の熟成がなされて来た、余裕ある人情が今だにしっかりと根付いていることこそが本来の特徴なのです。

アメリカのアップルトンという学者が、人間が安心して住める場所は、“相手からは隠れているが、こちらからは充分相手が観察出来て、しかも水の得易いところである”と定義しております。これに“人と人が気心を緩めて付き合える風情であること”と加えると、かなり地域は絞られて参ります。

ヨーロッパを含めて、大陸に住む彼等の風土と人情を見ると、確かにほとんど望むべくもない条件であり、それだけ憧れが強かったのでしょうか。だから、熊に向って母親は、自分の体を張って闘わざるを得ない精神構造の形成を示唆せざるを得なかったのです。

やはり、日本のように狭い空間の中に複雑な地形を持ち、共同体としての歴史と伝統を熟成させた世界でも限られた地域しかこれは満たせないのです。尾張町から金沢城というのは、そうした特別にして、人間の基本的条件の可能性を持った、ロイヤルボックスとでもいい得ることが出来るのではないのでしょうか。

### 「おやま」へ至るまで

近年では、金沢は長年に渡って熟成してきた、何物にも変えられない魅力によって注目されていますが、その歴史の舞台への登場は案外にのんびりしたものであったのです。

石川県地方が、まず越中の国から能登国として分立したのは、律令時代7～9世紀まで延々と続く蝦夷征討に必要な兵員や物資の補給基地としての役割からであり、又対岸交渉の玄関口としての役割を果たしていたからだと推測されます。しかし、東北の情勢が一段落するや否や天平13年(741年)から1時期再び越中国に併合されてしまいます。万葉集で有名な大伴家持が越中国司として赴任したのもこの頃です。

加賀国が誕生するのはやっと平安遷都が行われてからです。越前の国府(現在の武生市)から、加賀・江沼郡を切り離して独立してからのことです。

平安時代は、「受領の持ちたる国」として受領の厳しい収奪にさらされる中で後の武士階級が力を蓄わえる時でした。そして鎌倉幕府から南北朝内乱期には、北加賀の十字路(今の野々市)に守護所を構えた富樫氏が加賀の支配を得るので、やがて、今度はこの守護の圧政に苦しむ農民が浄土真宗による惣を結成しだし、ついに一向一揆へと展開して行くことになります。文明の一揆、長享の一揆を経て加賀は「百姓ノ持タル国」となり、本願寺の支坊が山崎村凹市で栄えていた場所(金沢城の前身)に最終的に建てられます。

この場所がどれほど加賀の人々の心の中心であったかということは、つい最近まで金沢近郊の老人達が金沢へ行くことを「おやま」へ行くといっていたことから分かることと思います。そして、「おやま」の中心とは金沢城であり、同時に尾張町をも指すことにもなっていたのです。

### 歴史に登場した加賀の意味

今までは中央から見向きもされなかった加賀地方が歴史の舞台になり始めたことで、戦国時代末期に天下を統一しかかっていた織田信長の武力闘争の対象

となり一向衆は減ぼされてしまうのです。中でも最も活躍した前田利家公は能登国・七尾について加賀国・金沢を得、1583年に金沢に入城します。

前田利家公は、一向衆の人々にとって重要な精神的意味を持っている、この「おやま」の場所に金沢城を建設するというまさにそのことで、加賀全部を旧秩序から自分の新態勢になびかせることに成功し、繁栄を迎えることになります。同時に、ようやく戦争中心から経済中心へとお城の役割が変わりつつあることを一早く見抜いていたともいえます。

ここに至りようやく、金沢が歴史の檜舞台に晴れて登場するわけです。実はこれまで陽の目をみなかったのは、

郷土史家の山森育硯氏によれば、“犀川が大変な暴れ川であり、絶えず乱流する水のために、今の金沢の中心地が洪水の危機に脅かされる沼地であり、人々が積極的に寄り付けなかったから”といわれています。だから、犀川の治水がなされて初めて、金沢はその本来の町としての構造を整える前提が出来上って行くのです。

前田利家公は七尾から金沢に来るや、早速土木工事として城郭の整備を行うと共に、沼地同然の犀川を、挙げて用水や堀としながら、水の流れをきちんとして下流に流すという大事業に専念したわけです。そのために、例えば石垣の高山右近とか、用水の板屋平四郎とかの技術者を使ったであろうことが推測されるのです。

そして又、人心の安定のために朱子学や諸学校を開設し、畠山時代からの流れをくむ和歌や連歌を教養とし、能楽(利常の頃より宝生流)を藩主自らが習う程に文化を愛したことが広く芸能の栄えるもとになったのです。こうした風潮は治世の安定に伴い、庶民にまで深く浸透し、加賀の伝統文化を育てて行くことになったのです。

この結果、山辺にして水辺という金沢の立地条件の良さが生かされ、同時に尾張町というロイヤルボックスが光ってくることになったわけです。ロマンとしての尾張町の空間的魅力がここに至って生じ、以降前田利家公の出身の尾張荒子地方より招かれた尾張町商人による活力は加賀藩の陽になり陰になりなが



ら歴史を作って行くことになるのです。

### 江戸三度京三度の役割

なる程、四百年前に前田利家公によって、尾張町は初めて町作りをされたわけです。利家公出身の尾張荒子の商人を呼び寄せてから、四百年もずっと生き続けて来たことは、他の町にはちょっとないことです。

前田家の庇護は当然受けてきたんでしょうが、これとて家柄町人とか町肝煎り役人をピックアップしてみても、特権的町人は金沢近郊にまで広く分布しており、必ずしも尾張町だけではなかったのです。うわべだけを見る限り、尾張町が前田家の特別の保護を受けていた様子は見られないのです。にもかかわらず、尾張町はやはり何らかの形で前田家の特別の庇護を受けていた節が感じられるのです。

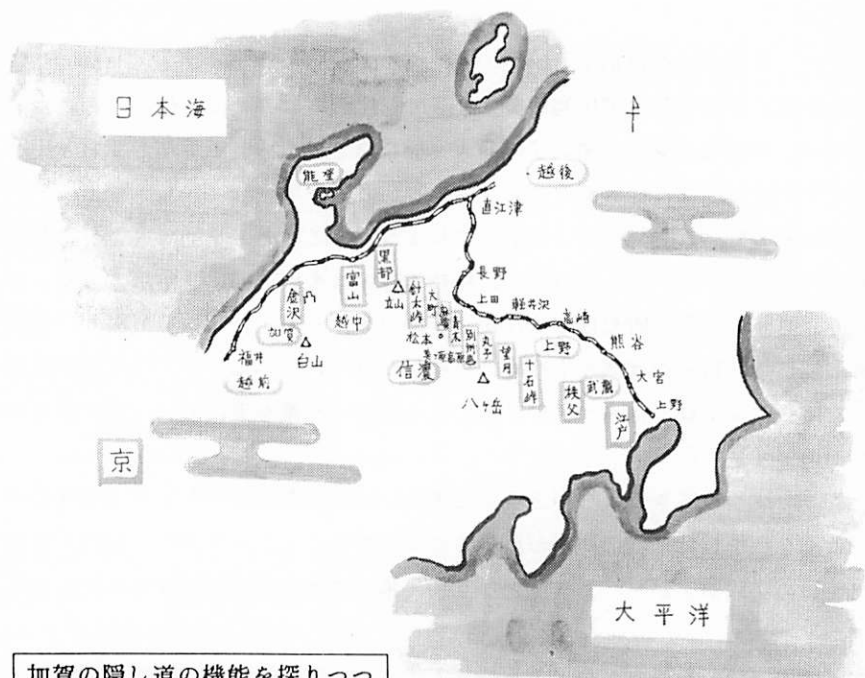
ここで注目すべきは、江戸三度京三度という飛脚制度があり、月に3度江戸や京都を往復した飛脚の拠点が尾張町にあったことです。当初は十間町にあったものの業績が上がり、月6度となり、一番効率的な尾張町に移されたものです。

仕事の内容は、手紙とか小包みを持って走っていたのですが、同時に將軍や天皇の情報を表立って交換するという大変重要な今の外交官のような役割をしていたのです。又、藩や諸士の用あるもの一貫目までは無賃輸送の義務を持っており、急用ある時は別に仕立飛脚を発していました。

萬治2年(1659年)の規定によれば、江戸=加賀間の早飛脚で、冬季間を除き5日以内とされていました。それ以上7~10日間のものは中飛脚、常飛脚と呼ばれていました。それぞれ路銀を別にしており、万一規定時間より超過する時は路銀を減らされたのです。この早飛脚は元来藩の足軽が勤めていたのですが、商人数名(4~5名)の株立になって尾張町で営業を開始するようになってから特に良く機能し始めたのです。

こうした情報の取り次ぎという藩政にとって大事なことを、民間の尾張町商人に任せていたことに、並々ならぬ前田家の配慮の一片を見せられる思いがする

のは私だけではないでしょう。



### 加賀の隠し道の機能を探りつつ

民俗学者で有名な柳田国男氏の「東国古道記」の中に、「加賀様の隠し道」ということが書かれています。その内容は、表の飛脚道とは別に江戸と加賀を一番短い距離で結ぶ道筋の確保だったのです。しかも、その道の存在を前田家の上層部以外に誰も分からなかった隠し道として、3代藩主利常公が作っていたことを推測しているのです。

2代藩主利長公の頃、加賀藩は慶長の危機を迎え、江戸表の徳川幕府から今にも取り潰しをされかかる時期がありました。ために、利家公の正妻芳春院松子が人質として江戸表へ行き、利長公自身も高岡へ隠居し、年若い弟の利常公が3代藩主となるいきさつが生まれました。

そこで、加賀藩としては以降こうしたことのないよう、江戸表の情勢を一刻も早く、秘かに入手するために隠し道を開発したようなのです。又これは緊急

非常の折りには、人買が江戸表で攻撃を受けたり、殺戮の危機に合った場合には、急いで金沢へ逃げ帰る道としての機能も持っていました。勿論、人に知られないために一切関所を通らず、しかも女性の足でも数日で歩けることが出来るようになっていました。

コースは、江戸の前田藩の下屋敷から一直線に秩父街道から十石峠を越え、八ヶ岳の北の佐久高原に出、小諸の近くの望月を通り、美ヶ原高原の東の丸子に至り、別所温泉に抜け、育木から麻績(長野と松本の中間)を通して大町に出、針ノ木峠を越えて黒部に通じる道でした。なる程、いろいろ峠は越えなければいけないのですが、女性の足にも易しい所が選ばれているのです。黒部にくれば、もう加賀藩の領内で安心出来るわけです。(現在の上野=金沢間の鉄道の480kmに対して、このコースでは210kmにしかありません)

ここまで来ると、そこには加賀藩の隠し飛脚であったと推測される餌指[えさし]が待っていたのです。餌指の表向きの役割は、鷹の餌になる小鳥を取るということになっていました。彼等は長い棒の先に取り餅を付けて、弥陀ヶ原をぶらぶらしており、江戸表よりの緊急の秘密飛脚を待っているわけです。そして、飛脚が来ると金沢城内の隠密を刺激させないために情報のバトンタッチを行い、彼等は譲り受けた情報を持って、何食わぬ顔をして金沢城下にある江戸三度京三度飛脚の取次所のある尾張町にやって来るという段取りだったようです。

江戸の隠密が、どれだけやっきになって調べても分からなかった加賀藩の情報収集の方法は、このように隠し道を使い、途中で情報のバトンタッチを行い、民間の商人町に集めてから、藩主のもとに届くという擬ったものだったと推測されるのです。当然、この商人達には絶対の信頼がない限り、出来得ることではないことはお分かりかと思えます。

#### 前田藩主より最も信頼された尾張町商人

現在、東京と地方の関係を見ると、全てが東京中心になっていることは否めません。けれど、藩政時代は逆に金沢中心の情報・文化の集積が行われており、

江戸表の徳川幕府の方がどちらかといえばつんぼ状態になっており、前田藩主は逐一江戸の動向を知っていたわけです。ですから、何事かあっても事前を知ることが出来て、何事によらず素早く対応し、徳川三百年の間、他の藩ではお家断絶が200件程あったにもかかわらず、前田藩はしっかりと生き残れたのではないのでしょうか。

推測ですが、尾張町商人は表向きの江戸三度京三度の飛脚制度を持つ反面、内実ではこうした隠し道の拠点として、加賀藩の情報網を扱っていたのではないかとと思われるのです。前田家としては、この情報網を完璧にするためには、文字通り腹を割って秘密を打合わせ、そして守ることの出来るのは誰かと考えた時、金沢土着の人間や、途中で家来にした人間でなく、貧しいながら前田利春の四男としての利家公が生まれ育ち、寝食を共にした尾張荒子の人々以外にはあり得なかったのではないかと.....。

尾張町に住まわせられた荒子出身の人々は、このようにして一見商人を装いながら、事実盛んに商売をやりながら、その陰で大変重要なシークレットな仕事を、前田家との結び付きの中でやってきたに違いないのではないのでしょうか。これが、尾張町が歴史の表面に出ないままに隠されていた面であり、又長続きしてきた謎の本質ではないかと推理するものです。

#### アナログの街・尾張町の未来

尾張町は空間の面と時間(歴史)の面で、他の何ものにも代えられないくらいに素晴らしいものを持っているのです。

近年、香林坊界限は近代化の道を歩み、金沢の洗練された面を強調し、一方武蔵から彦三大通りにかけても最近新しい開発の動きがありますが、そうした町にはない、古い伝統と個性というものを頑なに持ち続けてきた尾張町の値打が、今日の人々によく分かりかけて来たからではないかと思うわけです。

人間とは、どれだけ威張ってみても自分一人だけでは生きられる存在ではありません。自然や人間社会という空間の横糸、歴史や血のつながりという時間の縦糸の交わる座標軸として、人間の有り得べき実在の姿が初めて現われてく

るのです。とすれば、空間と時間が途切れずに流れ続け、伝統と文化が息づいている尾張町は、今日の意味での素晴らしい魅力があると申せましょう。

小堀為雄博士が指摘されるように、デジタルの如く、すでに限定された意味の不連続の連続という羅列ではなく、生き生きと血の通った、途切れることのない連続の中に、最も人間臭いアナログ的な未来の可能性が発見されるのです。尾張町が今、私達の心の奥底にアピールする理由は、そうしたところにあるのではないのでしょうか。

古き皮袋に新しい酒を盛る……尾張町の今日と明日を担う若い世代に、そのことを期待したいと思います。

#### 清水忠氏 略歴

昭和6年10月25日生。旧制四高を卒業後、金沢大学法文学部卒業。尾張町の分家の町である新町に住まいし、文学を愛する経済人である。現在、清水製網所社長、金沢経済同友会の常任幹事。

## あとがき

尾張町の魅力は、過去から現在、そして未来へ向かうまで、途切れることなく人々の心の中に「生きられて」あったことです。加賀国の立国、一向一揆による百姓の国、そして最大の変化たる前田利家公の入城と治世においても人々の心のつながりは連続と続いていたのです。「おやま」は第9師団本部となったり、金沢大学となったり、今また大学の移転で新しい姿をそろそろ目前に控えています。けれど、今までの人間本位のアナログ的な連続を忘れずに活用すれば、コンベンション都市金沢の魅力をさらに全国に知らしめるものになると信じております。何故なら、尾張町も又「おやま」の代弁者として、最もアナログ的に商人文化を形成して来たのですから……。極論すれば、尾張町ルネッサンスの気概を持って良い程に、人々の心の琴線に響くことを信じつつ。

今回、5月24日に「第3回尾張町再発見おもしろ散歩」を開催した折に、泉鏡花の町に住む文学を愛する経済人といわれる清水忠氏に案内役をしてもらうことが出来ました。氏独自の、人生体験を生かした尾張町の紹介を聞いている内に、参加者だけの話にしておくにはあまりにもったいないと考え、私共のシリーズでまとめることにした次第です。

郷土史を研究される専門の方に比べ、案内役の清水忠氏を始め、尾張町商店街振興組合・尾張町若手会の面々は、本業を持ちながらの取り組みであるため、そうした方々から見ればまだるっこしい点が多々あることはお許し願いたいと存じます。ただそれゆえにこそ、学問的視野にこだわらない、自由な発想が行われたことは、評価して頂けないものかと懣懣ながら考える次第です。未熟な推論を始め、お気付きの事柄などあればお知らせ頂けましたら幸いです。

尚、尾張町若手会は、この7月の定時総会に於いて2年毎の事業年度変更時期を迎えました。石野瑋一4代目会長(85～87年)より、武部守男5代目会長(87～89)にとバトンを移し、変わらぬ若さと実行力を持って街創りに当たって行動しております。2月に尾張町商店街振興組合の役員も若返って一新されており、共々にその活動に対してのご愛顧の程宜しくお願い申し上げます。

1987年8月発行

尾張町商店街振興組合

理事長 山田 勝二

尾張町若手会

会 長 武部 守男

編集責任 石野 琇一

金沢市尾張町一丁目11番8号